ERA

司城 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ERA

【コード】

N8686P

【作者名】

司城 遙

【あらすじ】

目的も無く変わり映えの無い日々を過ごす主人公、有沢魁。今生きている環境を退屈で無価値な世界だと考える彼は、荒れた日々を送っていた。ある日別の世界から来たイルマという女性に出会い、彼は次第に未だ見ぬ世界に思いを馳せるようになる。「価値の無い世界があると思う？」イルマの言葉の意味を確かめる為、退屈な日々から抜け出す為、彼は前に進む事を決意する。

Chapter 1 - 1 日常

目的も無く漫然と日々を過ごし、目的も無く学校に通う。

真新しい事も無く、変わり映えのしない毎日。そんな中、有沢魁ありさわ かいは荒れた日々を送っていた。

幼い頃に両親を亡くし、親戚に引き取られたあの日から、彼にとつての日常はすっかり変わってしまった。彼を引き取った親戚は、彼が高校に上がるなり、安いアパートの一室を与えて自立を促した。態の良い厄介払いだった。

最低限の生活費と、最低限の生活環境。彼のやり場のない感情は、いつしか彼の心に重い蓋をしてしまった。何かにつけて他校の連中と喧嘩をし、唯一仲の良かった幼馴染とも些細な事で衝突を繰り返していた。そう、今日と言うこの日も。

「ちよつと、聞いてんの？少しは落ち着きなさいって言ってるの！」
辺りに甲高い怒鳴り声が響く。魁の横を歩く幼馴染の豊川結依とよかわ ゆいは、聞く耳を持たない彼に苛立ちながらも、ひたすら説教を続けていた。原因は、先日魁が起こした他校生徒への暴行事件である。

「お前が落ち着けよ。何回同じ事言ったら気が済むんだ？」

魁は結依と目も合わせようとせずになんか放った。

「何回でも言うわよ！あんたがその足りないノーミソで理解するま
でね」

「そもそも、何で俺が説教受けなきゃいけないんだよ」

「喧嘩したのはあんたでしょ！」

「絡んできたのがあいつらからでもか？」

「うぐ……」

結依は痛い所を突かれて言葉を詰まらせた。

彼女が口煩く魁に干渉するのは、何とかして彼の今の生活を改善させたいが為である。幼い頃から一緒に過ごして来た事もあり、魁が元々どんな人間なのか理解しているつもりだった。少なくとも彼

女の中での有沢魁は、喧嘩に明け暮れ自分を見失うような人間ではなかった。だからこそ、今の魁の状況を看過する事など出来なかった。

「何にせよ！あんまり喧嘩とかやめてよね」

結依は強い口調でそう言った。

「おい、あれ見ろよ」

魁はポケットに手を突っ込んだまま、顎で道の先を指し示した。

「あつ、安田君だ・・・」

結依は思わず声を上げた。彼女が見たのは、同じクラスの安田雄二やすだゆうじが先日魁と争いを起こした連中に絡まれている姿だった。彼は元々気が弱く、力も無い。勉強は出来るが運動は・・・と言う様なタイプであった。その為、性質の悪い連中に絡まれるのも珍しい事ではなかった。

「雄二の奴、また絡まれてやがるのか」

三対一で好き放題にやられている雄二の姿を見ながら、魁はまるで他人事のように吐き捨てた。

「助けに行かないと。ほら、力つてのはこう言う時に使うもんじゃないの？」

「暴力はダメなんじゃなかったのか？」

魁はそっぽを向いて全く動こうとする気配を見せなかった。

「まったく！後で覚えてなさいよ」

結依はそう言うつと、ブレザーを魁に無理矢理預けて雄二の救出に向かった。

二人の住む町では有名な豊川道場の一人娘、それが結依である。幼い頃から鍛えられている為、並の相手に負ける事はまずない。今回の相手も、恐らくすぐに片付くだろう。

当然それを理解していた魁は、高みの見物と言わんばかりに結依が乱入していく姿を欠伸をしながら見守っていた。

あつと言う間に三人を片付け、結依が雄二を連れて戻ってきた。随分長い間絡まれていたらしく、雄二は既にボロボロだった。

「少しは落ち着きなさ」

「うるさい！」

結依は自分の口調を真似しようとする魁に対し、声を張り上げた。雄二、随分ポロポロじゃねえか。女に助けられるとか情けないったらありやしない」

魁はその場にへたり込む雄二を見下すようにしながら、そう言った。

「有沢君・・・いつもごめん」

雄二は俯き加減でそう呟いた。

「俺は何もしてねえだろ。結依に言ってる」

「ちよつと、何でそう冷たい言い方するかな。大丈夫？安田君」

「僕は大丈夫。それより豊川さん、ごめん。巻き込んだじゃってさ」

「いいのいいの、気にする事ないって」

結依は笑いながらそう言った。そこに魁が割って入った。

「てか雄二」

「え？」

「お前も少しは鍛えた方がいいんじゃないの？」

「・・・」

「いつまでやられっぱなしでいるつもりだ？自分の身なんて、最後は自分で守るしかねえんだよ」

魁はそれだけ言うと、預かっていたブレザーを結依に投げ渡すと、すたすたと一人で歩き始めた。

「どこ行くつもり？」

「帰る。あとは任せた」

結依の制止も振り切って、魁は一人でさっさと帰って行ってしまった。

「つたく、いつもああなんだから。安田君も気にする事ないよ」

「いや、有沢君の言う通りだよ・・・。耳が痛いな」

雄二はそう言いながら苦笑した。その表情には、少しばかり悔しさの色も滲み出ていた。

Chapter 1 - 1 日常（後書き）

どうも、司城遙です。

初めましての方は、初めまして。

どうぞよろしく願います。

前作の連載終了から間を空けずに、しかもまるで違うジャンルでの連載開始と言う事になりましたが頑張っ書いて行きたいと思いません。

初めてのファンタジー作品になります。

文章力、表現力など至らぬ点は多々ありますが、お付き合い頂ければ幸いです。

それでは、今後ともぜひ宜しくお願いします！

Chapter 1 - 2 問題児

次の日、魁は登校して早々に職員室に呼び出された。先日の件は既に散々説教を食らっていた。思い当たる事が見当たらなかったが、仕方なく彼は職員室へと向かった。彼が中に入るなり、生徒指導担当教師である大木の怒号が飛んだ。

「有沢！お前、またやらかしてくれたな！」

「は？何の事ですかね」

魁は最初から喧嘩腰で挑んでくる大木に対して、挑発的な態度でそう返した。実際、心当たりがなかった事も確かだが、何よりも大木の態度にカチンと来ていたからだ。

「お前は昨日の事すら覚えていないようなバカなのか？ええ？」

ヒートアップした大木は、魁の胸倉を掴んだ。

昨日と言えば、雄二が絡まれていた件だと魁はすぐに想像がついた。しかし、あの件に関しては全くのノータッチだったはずだ。そう自分の中で確認した。

「昨日？心当たりがありませんね、マツタケ」

胸倉を掴まれたままの魁は、臆する事無く言い放った。

「白を切るのも大概にしろ！お前にやられたと言っている被害者がいるんだ！」

大木の言葉を聞いた魁は、何となく何が起こっているのかを理解する事が出来た。先日返り討ちにした連中が昨日は結依にボコボコにされた。女子にやられたなどと言えるはずもなく、それを利用して自分を嵌めようとしているのだと。

魁の様子が気になり、こっそりと職員室の入口から様子を伺っていた雄二も、魁と同じ事を想像していた。本当ならばここで自分が真実を話せばよいのだが、凄じ剣幕で怒る大木と、それに対して挑発を繰り返す魁の間に割って入る勇気がどうしても出せずにいた。

「おい安田、どうした？」

突然背後から名前を呼ばれた雄二は、驚いて振り返った。そこには担任である西森葉子が立っていた。

「西森先生……」

「何だ何だ？うちの問題児がまた捕まってるの？」

「違います、先生。有沢君が悪いわけじゃ……。むしろ僕が悪いんです」

「ふーん。まあ、ちょっと様子を見ますかね」

葉子は雄二と一緒に職員室の入口から、大木と魁の様子に目を向けた。相変わらず一触即発のムードが漂っていた。

「で、俺がやったってんなら何なんですか？」

魁はいつまでも自分を解放しない大木に苛立ちを見せながらそう言った。

「その態度は何だ！ふざけているのか！？この問題児が！」

怒りが頂点に達した大木の拳が、魁の顔面に振り下ろされた。衝撃で体制を崩した魁は何事も無かったかのように大木の正面に立つと、彼の手首を掴んで言った。

「俺が問題児なら、俺がやった連中も同じくらいの問題児だ。問題児同士の争いにいちいち口を突っ込まなくていい。あんたもそこまですべじゃないだろう？」

その言葉と彼の目には、殺気がこもっていた。そんな魁に気圧された大木は、それ以上何も言わなかった。

「はい、ストップ。双方動くな」

不穏な空気を切り裂くように、葉子の声が響いた。入口近くにいたはずの彼女は、いつの間にか二人の間に割って入っていた。

「うちの問題児がお手数をお掛けしてます」

「本当ですよ。西森先生の指導力不足が原因じゃないんですか、こいつの素行の悪さは」

葉子の言葉に大木が噛み付く。

「まあ、私の指導力不足は認めます。でも大木先生も感情に任せて

生徒ぶん殴るなんて、大した指導力ですよね」

「ぐっ……」

葉子から放たれた最高の嫌味に、大木は言葉を詰まらせた。

「有沢、お前も悪い。先生に対する言葉遣いと、誰彼構わず挑発するクセを何とかしなさい。以上」

葉子は言いたい事を一通り言うと、自分の席に戻った。残された魁と大木は、二人揃ってぼかんと似たような表情を浮かべていた。

ようやく解放された魁は、気だるそうに教室へと戻った。その途中に、正面からやってきた結依と目があつた。

「あつ、また呼び出されたんだつて？何やらかしたのよ。校内放送までされちゃつて恥ずかしいの」

何も知らない結依は、呆れた顔をしながらそう言った。

「どっかの誰かさんのおかげで散々な目にあつたよ、バカヤロウ」

「え？何それ？」

「少しは落ち着いてろつてんだよ」

「ちよつと、どういう意味よそれ！」

魁はそれ以上何も話そうとしなかつた。

昼休み、彼は一人で屋上にいた。ここは彼の特等席だつた。元々は昼食をとる生徒たちの憩いの場だつたが、何かと悪い噂の絶えない魁が入りするようになってからと言うもの、すっかり普通の生徒たちは寄り付かなくなり、完全に貸しきり状態となつていた。

魁は寝転んで空を眺めていた。

「おゝい、問題児」

不意に誰かの声が飛んだ。その直後に、彼の視界を塞ぐ様に、葉子がひよっこりと顔を出した。

「ヨーコさん」

「西・森・先・生、でしょ？」

「はいはい、西森先生。何か御用で？」

魁は面倒くさそうに返した。

「ほら、これやるよ」

葉子はそう言って持っていた缶コーヒーを差し出した。

「・・・こんなもんくれたって、俺は何も話さんぞ」

とりあえず缶コーヒーを受け取った魁は、葉子に釘を刺した。

「別にいいよ」

「それならいいや」

彼はそう言つと、葉子に貰った缶コーヒーに口をつけた。

「今朝の件、やらかしたのって結依でしょ？」

葉子の言葉を聞いて、魁は口に含んでいたコーヒーを噴き出した。

「何でヨーコさんが知ってんだよ！」

魁はむせながらそう聞き返した。

「だって、昨日一部始終をこっそり見てたし」

「見てたなら、あんたが雄二の事助けりゃよかっただろ・・・」

「いやあ、私が見始めた頃には既に結依が二人ほどぶっ倒しちゃつてたからねえ」

葉子はそう言いながら笑った。

「ほんととんでもない教師だよ、ヨーコさんは」

「あんたもとんでもなく不器用よね。毎度の事だけど」

「はあ？」

「結依がやった事を話しちゃえば良かったのに。そうすれば大木先生にもすぐに解放して貰えたでしょ」

「んな事したらあいつが悪者になるだろ」

葉子の発言に、ムツとしたように魁が返した。

「そうやって自分から悪者になるところが、不器用って事よ」

「俺は・・・別にどうでもいいんだよ。結依は一応真面目だし、色々困るだろ。そう言うのは」

魁は静かにそう言つた。

「有沢らしいよ」

「あ？」

「まっ、私は結構好きだけどね。あんたのそう言つところ」

「ヨーコさんに好かれても嬉しくないっての」

「・・・可愛げのない生徒だな、あんたは」

葉子は、数少ない魁の理解者だった。彼女は魁と似たような境遇で育ち、荒れていた時期を送っていた事もあった。その分、魁の考える事などは他の教師よりも理解出来ているつもりだった。

頭ごなしに叱る事よりも、まずは話を聞く事をモットーとする彼女の姿勢が、次第に魁の心を硬く閉ざしていた蓋を抉じ開けた。実際、彼女が魁とここまで話せるようになるのには、長い時間がかかった。一年の担任時には、何を言っても取り付く島も無いような状況だったが、二年になってようやく今の状態まで持つて来れたのだ。

葉子にとって、確かに魁は色々な意味で問題児ではある。しかし彼女は、魁が自分から変わる事を願いつつ、見守っていく事を決めていた。自分自身がそうであったように。だからこそ、今朝の大木の態度を許す事が出来ず、彼らの間に割って入ったのだ。

何だかんだと悪態をつきながらも、魁は葉子の前では居心地の良さを感じていた。

Chapter 1 - 3 遭遇

その日の放課後、結依は道場での練習に参加する為、先に帰宅していた。魁はうるさく言う存在が傍にいないため、一人のんびりと帰り道を歩いていた。

鼻歌交じりに気分良く歩いていた魁は、河川敷に昨日の他校の連中がいるのを発見した。その姿を目にしたら、忘れていた怒りが込み上げて来た。よくよく考えれば、今朝面倒な目にあつたのは全てこの連中のせいである。憂さ晴らしに叩きのめしてやるうかと思いい、彼らに近寄ろうとしたところ、反対側から雄二が普段見せないような険しい表情をしながら走って来た。

「おっ？」

魁は思わず声を出した。

雄二は魁の方ではなく、他校の連中の方へと向かっていった。そして彼らの前に立つと、一言二言葉言葉を交わしていた。何をやっているのかと魁が見つめる中、予想もしていない事が起こった。突然、雄二が彼らのリーダー格の男に殴りかかったのだ。

「おっ？おっ？」

魁は予想外の出来事に身を乗り出した。

当たり前のように、手を出した雄二はあっという間に囲まれて袋叩きにされる。だがそれでも必死にリーダー格の男に向かっていき、取っ組み合いになってそのまま押し倒した。だが、雄二の奮闘もそこまでだった。二人がかりでリーダー格の男から無理矢理引き剥がされると、昨日と全く同じ状況に陥ってしまった。

「あのバカが・・・」

見ていられなくなった魁は、思わず走り出していた。

「おい、バカども」

魁が声を掛けると、一斉に視線が彼の方に集まった。

「そいつじゃ物足りないだろ。また遊んでやるよ」

魁の挑発に反応した三人組は、雄二を放り出して魁に一斉に向かつて来た。

「雄二」

「は、はいつ!？」

名前を呼ばれた雄二は、驚いて返事をした。

「俺一人じゃしんどいから、手伝え。いいな？」

三人組を軽くあしらいながら、魁はそんな事を言った。雄二は無言で頷くと、魁と一緒に相手に立ち向かった。

魁はおるか、結依にも叩きのめされるような三人組が今回急に逆転出来るはずも無く、今までと同じ結果であっけなく幕を閉じた。逃げ去って行く三人組を見送ると、魁と雄二は顔を見合わせた。

「あ、有沢君・・・」

「おう、もやしっ子。根性は少しだけ認めてやるよ」

魁はそう言いながら雄二の背中を叩いた。雄二は魁の言葉を聞いて、笑みをこぼした。昨日は完全に見下されていた自分が、今日は魁の隣に並んでいられる事が何より嬉しかった。昨日も今日もボロボロだが、雄二の中でその意味は大きく違っていた。

「今日は豊川さんは？」

「何だ雄二、お前あいつの事気になんのか？」

「そ、そんなんじゃないって!」

「ムキになるなよ。冗談だって。あいつは今日は道場で練習だよ。」

お前も弱っちいんだから鍛えてもらったらどうだ」

「・・・考えとくよ」

雄二はそう言いながら苦笑した。昨日の結依の戦い振りを見た限り、彼女に鍛えてもらう事でさえも容易ではないと感じ取っていた。彼らは適当に会話を交わしながら帰路についた。

そんな中、彼らの向かう道の先でとある出来事が起ころうとしていた。日が落ちて暗くなった道の先に、見慣れない服装の五人組が屯しているのを、魁が発見した。遠目でよく分からなかったが、初

老の男性が一人に、若い男性が二人。そして若い女性が二人。五人とも何かの戦隊物に出て来そうな感じの服装で、何か異質なものを感じさせる存在だった。

「変な格好の奴らがいるな」

「ほんとだ。何だろう、あの人たち」

「ま、関わる理由もねえよ」

魁と雄二はそんな話を話しながら、道を歩いていた。彼らと謎の五人組の距離は徐々に縮まりつつあった。

彼らは、まだ魁と雄二の接近に気が付いていなかった。

その中でリーダー格であると思われる初老の男性は、ゆっくりと口を開いた。

「アレックス、この場所で合っているのかね？」

「はい、誤差もありません。あと五分後に来ますね」

アレックスと呼ばれた男性は、時計状の物に目をやりながらそう答えた。

「ならば準備に入ろう。私とアレックスはこちら側を、イルマとテスラはあちら側だ。被害防止の為に一時的にこの空間を分離させる出来るな？」

イルマとテスラ、そう呼ばれた二人の女性は、一つ頷くとその場から消えた。

「ランディ、お前は周辺の安全確保だ。ここで見張っていてくれ」
「了解」

ランディと呼ばれた男性は若干気だるそうにそう答えた。

彼の返答を確認し、初老の男性とアレックスも姿を消した。一人残されたランディは、腕を組みながら退屈そうに欠伸をした。丁度そこに、魁と雄二が通りかかった。二人の存在に気が付いたランディは、乱暴な口調で声を掛けた。

「おい、お前たち。悪いがここはちょっと取り込み中だ。さっさと何処かに行け」

声を掛けられた魁と雄二は、揃って首を傾げた。ランディの言葉

は、彼らにとって理解の出来ない言語だったからだ。

「おい雄二、何て言ってるんだ？この外人さんは」

「分からないよ。英語じゃないっぽいし」

魁は雄二に耳打ちをして尋ねたが、彼にもランディの言葉は理解出来なかった。

「おい、ごちゃごちゃ言ってるでさつさと消えろって言ってんだよ」

言葉が通じず、その場で顔を見合わせている魁と雄二に、ランディは苛立ちを募らせた。時間を見ると、先程アレックスが示していた時間が迫りつつあった。彼は一つ舌打ちをすると、魁と雄二を怒鳴りつけた。

「このバカどもが！どけろって言ってんだろが！」

ランディは魁と雄二の胸倉を掴んで放り投げた。二人の体が宙に浮いてそのまま地面に叩き付けられる。それを確認したランディは、再び腕組みをしてその場の確保に務めていた。

「野郎……」

魁は首をぶんぶん振ると、立ち上がってランディに向かって行くとした。

「ダメだよ、関わらない方がいいよ！何か危ないって、あの人は！」

「俺はやらねばなしで黙っているほど、お利口さんじゃねえんだよ！」

雄二は体を張って魁を止めようとしたが、一度火がついた魁を止める事は誰にも出来なかった。しがみついた雄二を無理矢理引き剥がすと、魁はゆっくりとランディに歩み寄った。そして、背後から彼の肩に手をかけると同時に顔面に思い切り拳を叩き込んだ。不意打ちを受けたランディは、大きく体制を崩した。

「てめえ……」

「随分なご挨拶だったじゃねえか、外人さんよ！」

ランディと魁の怒号が飛び交う。どちらも完全に臨戦態勢に入っていた。雄二はそんな二人を離れたところから見つめている事しか

出来なかった。

細身の体で二人を軽々と持ち上げたランディの力は、圧倒的に魁よりも勝っていた。どう鼻頂目に見ても、魁の不利は明らかだった。しかし魁にも意地がある。やられてもやり返し、何度も殴り合いを続けていると、先程姿を消したアレックスが戻って来た。

「おい、何をしているんだ！」

アレックスは目の前の光景に驚いた表情を見せたが、すぐに状況を理解してランディを制止した。

「引っ込んでろ、アレックス！」

ランディは勢い良くアレックスを振り払うと、不気味な青白い光を放つ小さな石を拳に握りこんだ。

「ランディ、やめるんだ！リンクジエムを使うつもりか！」

「うるせえよ！」

ランディはアレックスの制止を完全に無視して、再び魁に向かって拳を振るった。その拳は先程までのものとは違い、明らかに速さも破壊力も圧倒的に増しているものだった。無防備な状態でランディの攻撃を受けた魁は、大きく吹き飛んでその場に倒れこんだ。彼は既に、意識を失っていた。

「有沢君！？有沢君！！」

一部始終を目にした雄二から、悲痛な叫びが漏れた。

「ランディ！！」

アレックスは力任せにランディを押さえ込んだ。そこに初老の男性とイルマ、テスラが戻って来た。

「アレックス、一体何があったの？彼らは？」

アレックスがランディを押さえ込み、魁は遠くで倒れていると言った異様な光景を目にして、イルマはそう言葉を漏らした。

「アレックス、もう時間だ。奴らが来る。彼らの安全を確保してくれ」

初老の男性はアレックスに指示を飛ばした。アレックスは一つ頷くと、ランディを解放して瞬時に魁と雄二のところに移動した。

「ここは危ない。じっとして欲しい」

「あ、え、あの・・・」

雄二は完全に頭が混乱していた。相手の言葉が分からない事と、魁がやられた事への恐怖から声にならない声が彼の口から漏れる。

そんな雄二に、アレックスは何か耳栓状の装置を渡し、耳に装着するようにとジェスチャーで促した。雄二はすぐにその装置を装着した。

「僕の言葉が分かる？」

先程まで理解が出来なかったアレックスの言葉が、雄二にも理解出来る言葉となつて聞こえてきた。

「あ、あの、分かります。聞こえています。でもこれは一体・・・」

「君の友達の事は許して欲しい。僕たちは君たちに危害を加えるつもりは無い」

アレックスの言葉に、雄二はただ頷く事しか出来なかった。

「・・・あなたは一体何者なんですか？」

「その問いには、目の前の事が片付いてから答えるよ」

アレックスがそういつた瞬間、大気が震えるほどの咆哮が辺りに響いた。その大音量の叫びは、雄二の意識を一瞬で断ち切るのに十分過ぎる程のものだった。

「ためえら、ふざけやがって・・・」

雄二と入れ替わるように、魁が意識を取り戻した。彼は必死に体を動かそうとしたが、全く動かす事が出来なかった。ランデイの一撃でそれだけ重大なダメージを負っていた。

「意識が戻ったのか。頼むからじっとしててくれよ」

アレックスはそう魁に声を掛けたが、彼にはその言葉は理解出来ていなかった。

やがて、声の主がその姿を現した。一軒家ほどのスケールの、この世の物とは思えない怪物が、目の前に3体出現した。

「イルマ！テスラ！」

初老の男性がそう叫ぶと、イルマとテスラはそれぞれ目の前の怪

物に向かつていった。魁は再び意識が遠のくのを感じた。目の前で起こっている光景に対する驚愕と、ランディへの怒りから、決して意識を失うものかと気を張っていたが、彼は間もなく力尽きてしまった。薄れゆく意識の中で、魁は怪物に立ち向かう彼らの姿を目にしていた。

Chapter 1 - 4 イルマ・トリエルタ

魁が目を覚ましたのは、病院の一室であつた。体を動かそうとしたら、全身に激痛が走つた。彼は体の痛みと共に、自分に何が起つたのかをはつきりと思い出した。謎の五人組と、謎の怪物。あれは一体何だつたのか。到底理解出来ないような非現実的な出来事だが、体の痛みと今自分が置かれている状況が、現実の出来事であつたのだと物語る。

唯一動く手を使って、彼は自分の頬を抓つてみた。やはり夢ではないのだと確信した。混乱した頭の中が少し落ち着いた時、ノックと共に病室のドアが開いた。

「有沢君・・・？」

現れたのは雄二であつた。彼は魁と目が合った瞬間、驚いた表情を見せた。

「良かった、意識戻つたんだ。本当に良かった」

「でかい声出すな。頭に響く」

「あつ、ごめん・・・」

雄二はそう謝りながらも、話が出るくらいに回復した魁を見てほつとしていた。

「雄二」

少しの沈黙の後に、魁が口を開いた。

「俺がここにいるって事は、あれは現実か」

「信じられないけど・・・でも僕もこれを見ると疑う事が出来ないよ」

雄二は魁の問いに答えながら、ポケットからある物を取り出した。

「これは？」

魁が不思議そうに尋ねる。

「アレックスって呼ばれてた人が僕にくれたんだ。これをイヤホン

みたいに耳につけたら、彼らの言葉が理解出来た。・・・変な話だよね」

雄二はそう答えた。

「俺はこんな状況じゃ疑う余地もありやしねえよ。体が動かん」

「そうだ有沢君。色んな所を骨折してるみたいだよ。全治三ヶ月だつて。安静にしてないとダメだよ。僕と豊川さんで身の回りの事を見る事にしたからさ」

「はあ？身の回りの世話なんていらねえよ。そんな重病人みたいな扱いは御免だぜ」

「重病ではないけど、十分過ぎるほど重傷だよ。とにかく、安静にしないとダメだよ」

雄二は強い口調でそう言った。

「学校には説明のしようがないな」

「本当にね。あんな事、話した所で信じてもらえるわけがないし」

「何て言つてあるんだ？学校には」

「河川敷で思い切り転んだ事にしてあるけど・・・」

「転んで全治三ヶ月つて、どんだけレベルの高い間抜けだよ・・・」

「だ、だって、他に説明のしようがないよ。有沢君だったらどうする？」

「・・・仕方がない、と思いたくないが仕方がないか」

「でしょ？まあ、とりあえず学校の事は気にしないでいいよ。戻つてから僕と豊川さんでいくらかでもフォロー出来るしね」

「お前に変な借りを作る事になるとはな」

魁は不満げにそうこぼした。

「変な事気にしなくてもいいよ。そんな事を言ったら、僕は有沢君と豊川さんに数え切れないくらいの借りを返さなきゃいけない事になつちやうよ」

「返さないつもりだったのか？」

「えっ・・・」

「・・・冗談だよ」

魁は軽く笑った。

雄二が帰った後、魁はやる事もなくボーッと天井を見つめていた。雄二の説明によると全治三ヶ月。骨が数本やられているらしい。腕を犠牲にしたとしても防御した方がマシだったかも知れないなと魁は思った。彼は雄二から渡された耳栓状の謎の装置を耳に装着しながら、色々と考えていた。

ランディにやられた時の状況を思い出した彼の中に、何とも言えない悔しさが込み上げて来た。何かにつけて喧嘩をするようになってからと言うもの、魁は負け知らずだった。

対ランディ戦での敗北は、彼にとって圧倒的な力の差を思い知った敗北であった。

「ただの喧嘩ですら上がっているって事か」

彼はそう呟きながら拳を握り締めた。体を動かしたい。まだまだ鍛え足りない。もどかしい思いが彼を苛立たせていた。

どのくらい考えを巡らせただろうか。彼は退屈してテレビをつけた。流れているニュースには何も興味が沸かず、彼の耳を左から右へとすり抜けていくだけだった。その時、窓の方から何かの気配を感じた。思わず振り返った彼は、自分の目を疑った。

そこにいたのは、先日魁と雄二が出会った五人組の中にいた女性の一人であった。彼女は、突然振り返った魁に驚いて目を丸くしていた。

「な、何だお前は！どっから入って来た！？ここ四階だぞ！？」

彼女の存在に驚いた魁は、大声でそう叫んだ。

気配も無く、しかも四階の病室の窓際に立つ女性。彼は今自分が置かれている状況が全く理解出来ずにいた。

「しーっ、お静かに願います。大きな声出さないで下さい」

彼女は丁寧な口調でそう言いながら魁の口を塞いだ。身の危険を感じた魁は、咄嗟に彼女に向かってパンチを繰り出した。魁の口を塞いでいるのとは反対の手で、彼女は魁の拳を簡単に受け止めた。その瞬間魁の体に激痛が走り、彼は悶絶した。

「そんな体で暴れてはいけませんよ。大丈夫、危害を加えるつもりはありませんから」

彼女はそう言つて微笑んだ。

受け止めた魁の拳をそつと放すと、彼女はぺこりと頭を下げた。

「今日はお詫びに来たんです。うちの隊員がこんな怪我をさせてしまつて。本当にごめんなさい」

魁は目の前の状況が未だに良く理解出来ず、ぽかんと口を開けていた。

「それでは私はこれで失礼します。また今度伺いますので。本当に申し訳ありませんでした」

「・・・ちよつと待て」

去ろうとする彼女の腕を、魁は思わず掴んでいた。彼は知りたい事が幾つもあった。ここで機会を逃したら、二度とその疑問が晴れる事がない。何故かそう感じた魁は、今持っている疑問を彼女にぶつける事にした。

「あんたらは一体何者なんだ？」

単刀直入な魁の問いに、彼女は硬い表情を見せた。その彼女の表情は、無言ながらも質問には答えられないと言つ意思を示していた。「答えられないか。じゃあ、せめてあんたの名前を教えてください。名前くらいならいいだろ？」

魁は彼女の目を見つめながらそう質問を変えた。

「・・・イルマ。イルマ・トリエルタ」

少し戸惑いながら、彼女は小さな声でイルマと名乗つた。

「イルマ？それがあんたの名前か。名前からすると外人か？」

「外人・・・と呼ぶのが適切かどうかは分かりませんが、あなた方にとつてはそれに近いかも知れませんか」

イルマは静かにそう言つた。

「俺は色々と疑問があるんだ。まず、ここは四階だ。どうやって入つて来た？それに、この間のあの怪物は何なんだ？あんたらの言葉が分かるようになるこの装置は何だ？あんたらに関わる全てのもの

が、俺の理解の外だ」

魁は耳に装着していた謎の装置を取り外しながら、早口でそう言った。幾つもの質問を重ねられて、イルマは困惑した表情を浮かべた。

「何もかも秘密ってわけか」

魁は装置を耳につけなおし、ため息をついた。

「ごめんなさい」

イルマは伏目がちにそう呟いた。

「そうだ、さっきうちの隊員とか言ってたな？隊って何だ。あんたらどっかの部隊なのか？それとも何かの特殊部隊？」

また魁の質問攻めが始まった。イルマは意識せずに隊員と言言葉葉を口にしたが、全てを秘密にしようとしている彼女にとっては誤算であった。

どうやって誤魔化そうかと彼女が考えていた丁度その時、とあるニュースが始まった。「CG？特撮？未知の生物と未知の人物の撮影に成功か？」などと言う見出しでニュースが流れ始めた。

そこに映っていたのは、魁が意識を失う直前に目にした怪物の姿と、それと戦うイルマの姿であった。

イルマはその映像を前にして、啞然としていた。

「おい、これあんたじゃないのか？スクープされてんぞ……」

魁は画面を指差しながらイルマの方を見た。

「あちゃー……。まずい、まずいなあ。ベイカー隊長に怒られちゃうよ……」

先程の大人びた口調とは打って変わって砕けた口調になったイルマは、ニュース画面を見ながらショックを受けていた。

「お、おい。大丈夫か、あんた」

ぐったりと頂垂れるイルマを見て、魁は声を掛けた。

「空間分離に失敗してたんだ。絶対怒られる……。どうしよう」

イルマはそう言いながら魁の方を見た。

「いや、どうしようって言われても」

「だよね・・・」

イルマは大きなため息をついた。しばらくシヨックを受けて固まっていたイルマは、何か吹っ切れたように首を大きく振った。

「ああ、もう。いいや、隊長には後で言い訳しよう」

イルマは投げやりにそんな事を吐き捨てた。

「あんたえらくキャラが変わってないか？」

「ん？こつちが地・・・だと思っ。謝罪に行つて来いって言われて、さつきは物凄く緊張してたから」

イルマはそう言いながら照れ臭そうに笑った。

「てか、もう一度聞くが、あんたらは一体何者なんだ？あれだけ堂々と報道されて、隠し通せるのか？」

「・・・知りたいよね、そりゃ。私も多分、同じ様な事になったら知りたくてたまらないもの」

魁は一つ頷いた。イルマは一つ深呼吸すると、観念した様に話し始めた。

「私達はE R Aって言う組織の一員なんだ」

「E R A？何だそりゃ？特撮でもやってる会社か？」

「長くなりそうだから何から話していいか迷うんだけど・・・まず初めに、私達はこの世界とは違う世界の人間なんだ」

イルマはゆっくりと魁に説明を始めた。イルマの口から飛び出した発言は、最初から魁にとって理解不能なものだった。

「違う世界？まさか、宇宙人って事か！？」

魁は驚いて声を張り上げた。

「お、大声出しちゃダメだってば！」

イルマは慌てて魁の口を塞いだ。そして、魁が落ち着いたのを確認すると、再び説明を始めた。

「宇宙人ではないよ。もつと広い意味での世界なの」

「広い意味での世界？」

「簡単に言うと、世界って言うのはこの星だけじゃなくて他の星と

か宇宙も含めて一つの世界って単位なの。そこまでは理解出来る？」
「何となく・・・」

魁はイルマの話を中心に理解出来ていなかった。そんな事もお構いなしに、イルマは説明を続けた。

「私たちの世界はこの世界の外にある別世界って事なの。私たちの世界にも宇宙があつて、星があつて。でもここは全く別の世界って事」

「そんな事信じられるわけが・・・」

魁は顔をしかめた。イルマが嘘を言っているようには見えないが、何よりも自分の頭の中での理解と言ふ意味で、信じる事が出来なかった。

「それは当然の事だと思う。私だってこの世界に来て初めて、それを信じる事が出来たんだもの」

イルマはそう言った。

「頭がこんがらがって来たが、その異世界人であるあんたらが、何でこの世界にわざわざ？」

「私たちは、この世界の安全確保のためにE R A本部から派遣されたの。見たでしょ？あの怪物。あれも別世界の生物なの。キミのいるこの世界とも、私の世界とも違う、全く別の世界の生物」

「あれは一体何なんだ？」

「あれは私たちの間ではレギオンって呼んでる生物。獰猛な上に集団で現れる厄介な奴らよ」

「何であんなもんが急にこの世界に？」

「それは私には分からない。本来、世界同士は隔絶されて、お互いに独立した形を保ってる。だから殆どの人は、異世界が存在するなんて知る事も出来ない。だけど、ここ最近、色んな世界でレギオンの襲撃が確認されてる状況なの」

「で、あんたらが奴らを退治して回ってるって事か？」

「正解。本来は周囲一帯の空間を隔離して、安全を確保してから撃退するの。この間は、キミたちの存在に気づけなかった私たちが全

面的に悪いんだけどね・・・ごめんなさい」

イルマはそう言ってもう一度謝った。

「でも、何でもこそそ活動している？やり辛いだろ、あんたらも」「やり辛いけど、混乱回避のために仕方がないのよ。本部からもきつく言われているし。何より、説明するにしても信じて貰えると思っ？」

イルマは困ったような表情でそう尋ねた。魁は首をぶんぶんと横に振った。

「無理だな・・・。こうやって話を直接聞いてる俺でも、全くもって意味がわからん」

「でしょ？だから仕方がないのよ」

「仮にあの時、あんたらがいなかったら」

「ん？」

「俺も雄二も殺されてたって事が」

「多分・・・。この世界に、レギオンと戦うだけの技術はまだないと思うから」

「だとしたら、俺らはあんたらに感謝しないといけないな」

「そんな、感謝だなんていいよ。私たちの仕事だし」

イルマはそう言いながらも、嬉しそうに微笑んだ。

「こんな姿にされたのは屈辱だけだな」

魁はランディから受けた傷の事を思い出し、そう吐き捨てた。

「私がこんな事言うのもなんだけど、死ななかつたのが不思議なくらいだよ？アレックスから聞いたんだけど、ランディはジェムの力を使ったみたいだし」

「ジェム？」

「えっとね、リンクジェムって言ってERAの隊員は全員持つてるんだ。私のはこれね」

イルマはそう言いながら自分のイヤリングを指差した。イヤリングの中心に、琥珀色に光る宝石のようなものがついていた。

「これはね、使う人に色々な能力を与えたり、その力を増幅させた

りする石なんだ。ランディは単純に自身の力を増幅させる能力だったかな、確か」

「つまり、その石があんたらの強さの源ってわけか？」

「んー、そうとは限らないかも。私のは、増幅する物とはちよつと違うし。そもそもアリエステ人は、イスタータ人に比べて身体能力も大分高いしね」

「アリエステ人？」

「ああ、私たちの世界の名前だよ。アリエステって言うの。ちなみにイスタータって言うのはこの世界の名前だよ」

「へえ」

魁は間の抜けた声を出した。色々といルマの話聞いたが、納得して理解出来るような内容は全くなかった。異世界人、レギオン、リンクジエム、アリエステ。彼女の口から出てくる言葉は、何もかも魁の理解の外にあるものだった。

その後も魁といルマは色々な話をした。理解は出来ないながらも、彼女の話は魁にとって興味深いものだった。何の変わり映えもしない毎日を送っていたせいも、非常に刺激的な内容であった。まるで自分がファンタジー世界の中にいるような、不思議な感覚だった。

「それにしても、こんなに色々と話して良かったのか？」

「んー、まずいかもね。でもいいんだ」

「いいのか？」

「あのね、私初めてなんだ」

「何が？」

「別の世界で、初めて知り合いが出来た。私さ、これが初任務なの。ずっと外の世界に憧れてて、外に出たら別の世界で絶対友達作ってやるぞって思ってたんだ」

イルマはそう言いながら嬉しそうに笑った。

「なるほどな」

「嬉しかったから、サービスって事で。えへへ」

退屈な日常を送る魁は、いきいきとしたイルマの表情を見て羨ま

しさが込み上げて来た。自分に比べて彼女は自由だなと感じた。

「あつ、そろそろ戻らないと。もうこんな時間だ」

「そうか」

魁は少し残念そうにそう呟いた。

「しばらくイスタータに駐屯する事になりそうなんだよね」

イルマはそんな事を言った。

「でね、時々休みがありそうなんだ」

遠回しにイルマは何かを言いたそうにしていた。それに気付いた

魁はそつと声を掛けた。

「また来るんだろつな？」

「え？」

「あんたらにこんな状態にされて退屈なんだよ。責任とって、また俺が退屈しないように何か話しに来いよ。聞くだけ聞いてやるからさ」

魁自身、まだまだイルマの話を聞き足りないと思っていた。しかし彼も素直な性格ではない為、あえてそんな言い方で片付けた。

「うん、必ず」

イルマは嬉しそうにそう言い残すと、音もなく姿を消した。

彼女が消えた後、魁はそつと自分の胸に手を当てた。柄でもなく、胸が高鳴っていた。未知の世界への探究心？誰も知る事が出来ない世界を知った優越感？何が彼に影響を与えていたのかは分からない。彼自身あまり認めたくない事ではあったが、イルマの話す世界に強い興味を示す自分がいた。胸の高鳴りが、今日起こった出来事と、彼の中に芽生えた感情が嘘ではない事を物語っていた。

Chapter 1 - 5 消えた約束

それから、魁とイルマは何度も顔を合わせた。その度にイルマからアリエステの事や、その他色々な彼の知らない事を聞かされた。

魁は日に日に、自分の知らない世界に対しての思いを募らせるようになっていった。魁とイルマの出会い、お互いにとって大きな意味を持つものであった。特にイルマの話が飼いに与えた影響は、計り知れないものがあつた。

退院を翌日に控えたこの日も、イルマは魁の前に姿を見せていた。彼女が魁の病室を訪れ、いろいろな話をする事はすっかり日課のようになっていた。

「ずっと疑問に思ってたんだが、レギオンを全部倒したら、その後はどうするんだ？」

「次の仕事に行くよ」

「次の仕事？」

「うん。レギオン退治はERAの本来の仕事じゃないからね」

「何が本来の仕事なんだ？」

「うーん・・・何て説明すればいいんだろう。簡単に言うと、色々な世界を回って、色々な事をするんだ」

イルマは難しい顔をしながらそう答えた。

「さっぱり分からん・・・。だけど、これからも色々な世界に行くって事だろ？」

「そう。私、子供の頃からの夢があるんだ」

「夢？」

魁が聞き返すと、イルマは微笑んで一つ頷いた。

「はるか遠い昔、世界は一つの大きな世界だったの。そしてある時、無数の小さな世界に分離された。イスタータとアリエステみたいにね」

彼女は静かに語り始めた。

「私は、世界が始まった場所・・・どこかにあると言われていてる果ての世界。全てが始まった場所にこの足で立ってみたいんだ。」

そう言った彼女の表情は、希望と決意に満ちていた。

「果ての世界？」

「そんな所があるかどうかも、未だ分からないんだけどね」

イルマは照れ臭そうに笑った。

そんな彼女の表情を見て、魁はもどかしさを抑え切れなくなった。

「・・・俺はあんたが羨ましいよ」

「どうして？」

「俺は外に出たくても、この世界で生きて行くしかない。外に出る為の技術も、そう言う知識も、意思も、この世界は何一つ持つちゃいないからな」

「カイ・・・」

「正直、俺はずっと退屈だった。この日常に、この世界に、何の価値があるんだってずっと考えていた。でも最近では、そんな事を考えずらしくなっていた。考えた所で無意味な事だからな。気がついたら、こんな無気力で無関心な日々だけが残った。笑っちゃうよ」

魁は吐き捨てるようにそう言った。退屈な世界で発生する退屈な日常。大元が退屈なら、そこから生まれるものも退屈だった。この世界に存在する様々な価値は、どれも彼を満たす事は無かった。

「あんたの話を聞いて確信したよ。俺の求める価値は、この世界には無いんだって。俺にとってこの世界は無価値なものだ」

「カイ」

「何だ？」

「どんな世界であっても、本当に価値の無い世界があると思う？」
イルマは真剣な表情でじつと魁の目を見つめた。たった一言だったが、彼女の真っ直ぐな瞳を見ただけで、何よりも説得力のある言葉のように魁の心に響いて来た。

「まあ、あんたがそう言うならそうなのかも知れないな」

魁の言葉を聞いて、イルマはそつと微笑んだ。

「ところで、明日退院する事になったんだ」

「え、ほんと？良かったあ。やっと退院なんだね」

「丸々三ヶ月かかっちまったな。あの野郎、次に会ったら必ずぶつ飛ばしてやる」

「あはは・・・」

ランディの事を思い出しいきり立つ魁を見て、イルマは苦笑した。

「俺が退院って事は、あんたがここに来るようになってから三ヶ月って意味でもあるな」

「三ヶ月かあ。もうそんなに経つんだね」

イルマはしみじみとそう言った。

「色々話も聞かせて貰ったし、明日は俺たちの世界への滞在記念で祝ってやるよ」

「お祝いしてくれるの？」

「ああ、色々世話になったしな。借りは返さないと気が済まないからな」

「約束？」

「ああ、約束だ」

魁にそう言われ、イルマは嬉しそうに笑った。

やがてイルマが基地に帰還する時間になり、魁とイルマは明日会う約束をして別れた。

彼女らERAは、とある場所に周囲からは見えない基地を構えていた。その本格的な施設は、イスタータでの任務が長期に渡る予定である事を暗に示していた。

いつになく嬉しそうに基地に帰還したイルマは、何かいつもと違う空気を感じ取った。何が起こったかは分からないが慌しく動く隊員たちの姿が目についた。そんな様子を目の当たりにしたイルマは、不思議そうに辺りをきよるきよると見回していた。

「イルマ様」

背後から声を掛けられたイルマは、くるりと振り返った。そこには、不安げな表情で同じ隊の仲間であるテスラが立っていた。

「テスラ。何だか慌しいけど、何が起こったの？」

「それが・・・私の口からはちよつと。ベイカー隊長が至急司令室に来るようにとの事でした」

「分かった。隊長に直接聞いて来る」

イルマはそう言うと、駆け足で司令室へと向かっていった。その後姿を、テスラは悲しげな表情で見つめていた。

「イルマ・トリエルタ、入ります」

イルマが司令室に入ると、彼女の部隊の指揮官であるベイカーが深刻な表情を浮かべて座っていた。

「イルマ、帰ったか」

「はい。基地内が慌しいようですが、何があつたんですか？」

「その件だが、落ち着いて聞いて欲しい」

ベイカーは表情を変えずにそう言うと、一つ深呼吸をしながら続けた。「これからすぐに、アリエステに帰還する事になった」

「えっ？」

イルマは耳を疑った。

「言葉の通りだ。私の隊は解散する事になった」

ベイカーは俯きながらそう言った。

「どうして、急にそんな・・・。一体何があつたんですか！」

「ランデイに対し、E R A本部から捕捉命令が下つた。先程、本部からの捕捉部隊に拘束され、一足先にアリエステに送致された」

「ランデイが？」

「ああ。イスタータ人へのリンクジェム使用の件だ。あの件が本部に目を付けられてしまった」

「そんな・・・。私達は巻き添えですか!？」

「イルマ、部隊は全員で一つなのだよ。責任もまた然り、だ」

「でも、そんなのって・・・」

イルマはベイカーの言う事に納得が行かなかった。彼女は悔しそ

うにぐつと唇を噛み締めた。

「ベイカーの言う通りだ」

イルマの背後から、低い声が聞こえた。彼女が驚いて振り返ると、顎鬚を生やした体格のいい男が立っていた。

「ゴドリック、着いたのか」

ベイカーはその男の姿を確認して、声を掛けた。

「ベイカー、久しぶりだな。こいつの相手はなかなか大変だっただろっ」

ゴドリックと呼ばれた男は、イルマの方に視線を向けながらそう言って笑った。

「何であんたがここにいるのよ！」

イルマはゴドリックを睨み付けて声を張り上げた。その彼女の表情は、普段の穏やかなものとはかけ離れていた。

「イルマ、ゴドリックは我々の引継ぎだ。我々に代わってイスタータはゴドリックの部隊が管理する事になった」

「あり得ない！あんたみたいな奴がイスタータの管理だなんて」

ベイカーの説明を聞いたイルマは、余計に興奮しながら声を荒げた。

「そう言つなよ。俺だって好きでこっちに來たわけじゃない。本部の決定だ、従わなきゃならんだろう」

興奮するイルマに対して、ゴドリックは冷静にそう言った。

「絶対にあり得ない！あんたなんかには任せたらイスタータの安全なんて保障されない。みんな、みんなレギオンに殺されるんだ！」

イルマは目に涙を溜めながらそう叫んだ。

「イルマ……！」

見兼ねたベイカーの怒号が部屋に響いた。驚いて体を強張らせたイルマの視界を、ゴドリックの手のひらが塞いだ。次の瞬間、イルマはふつと意識を失った。

「テスラ！ちよつとこっちに來い」

イルマの体を支えたゴドリックは、司令室の入口の方に向かって

そう言った。こっそりと中の様子を伺っていたテスラが、びくびくしながら顔を出した。

「部屋に連れて行ってくれ」

「は、はい……」

テスラはイルマを背負って、司令室から出て行った。

「あいつのお守りは大変だっただろ？」

ゴドリツクは苦笑した。

「そんな事はない。彼女は立派に任務に当たっていたよ」

「へえ、意外だな。少しはオトナになったのかね」

「お前も何かと大変だな、ゴドリツク」

「なあに、もう慣れたよ」

「それはそれで悲しいものだ。まあ、後の事は頼むぞ。粗方片付けておいたが、まだ完全に安心出来る状況ではないからな」

「相変わらず、お前はきつちりと仕事をこなすな。俺には真似出来ねえよ。まあ、アレックスもいる事だし、俺は酒でも飲みながらのんびりやるさ」

ゴドリツクはそう言いながら笑った。

それからしばらくして、イルマは自室で目を覚ました。

「ここは？」

イルマはまだボーっとする頭をぶんぶんと振りながら、辺りを見回した。そこには、彼女が目を覚ますのを待っていたテスラの姿があった。

「テスラ、私……何があったんだっけか」

テスラは何も言わずに、俯いたままだった。

「そうだ、思い出した。アリエステに帰る事になったんだ……」
イルマもそれだけ言うと、押し黙ってしまった。彼女は、色々と考えた。これ以上イスタータに留まらない事実、初任務の途中での帰還、そして魁との約束を果たせない事。何もかも納得の行かない事ばかりだった。

「……約束があったんだよ」

「あのイスタータ人ですか？」

テスラの言葉に、イルマは黙って頷いた。

「失礼かと思いますが、我々と彼らは違います。あまり特別な思い入れをされては・・・」

「そうだね。テスラの言う通りだよ。でもね」

「でも？」

「嬉しいんだ、他の世界の人たちとつながれるって事が。テスラと出会えた時と同じ様に、ね」

イルマはそつと微笑んだ。

「イルマ様・・・」

テスラはそれ以上は何も言わなかった。

「アリエステに戻ってどうしようね、私たち」

寂しげな表情を浮かべながら、イルマが尋ねた。

「どうなるんでしょう・・・。部隊も解散ですし、先が見えませんか」

「そうだね」

イルマとテスラは揃ってため息をついた。互いに初任務であった彼女らの無念は、計り知れないものであった。ランディが起こした事件に関して、直接責任を問われる事はないだろうが、部隊の解散は遠回しにERA隊員としての活動が出来なくなる事を意味している。次の任務が回ってくるかどうかは、全く分からない状況であった。

「ねえ、テスラ？」

「はい？」

「一つだけわがままを聞いて欲しいんだけど」

「わがまま、ですか？」

テスラの答えを待たずに、イルマはこそそとテスラにある事を耳打ちをした。

「私が行くんですか!？」

イルマの話聞いたテスラは、慌てるあまり声を上擦らせた。

「お願い！テスラならこつそりやれるでしょ？」

「まあ、出来るとは思いますが・・・」

「じゃあ決まりね？いやあ、持つべきものはテスラだなあ」

イルマは一方的に決定すると、満面の笑みを浮かべた。嬉しそうにするイルマを見ると、テスラは断る事が出来なかった。だが、それと同時に複雑な感情が彼女の中に生まれていた。

イルマの部屋を後にしたテスラは、基地の隊員に悟られないように、自然体を装って行動していた。しかし肝心な所で不器用な彼女の挙動は、明らかに硬いものになっていた。自室に戻る途中、正面からやってくるゴドリツクの姿を目にして、彼女は緊張で体を強張らせた。彼に悟られぬよう、軽く会釈をして横を通り過ぎる。無事にやり過ごしたと思い、テスラはほっと胸を撫で下ろした。その瞬間、背後からゴドリツクの声が飛んで来た。

「おい、テスラ」

彼女は驚いてその場に立ち止まり、ゆっくりとゴドリツクの方に振り返った。

「は、はい」

「イルマの様子は？」

「あの、その、意識も取り戻されて、今は自室でお休みになっています」

「そうか。それにしてもテスラ、お前はいつも堅苦しいな」

「そう・・・ですか？」

「そうですね、いつも口調が硬いだろうが。もう四年だろう？そろそろ打ち解けて欲しいもんだが」

「いえ、その・・・すみません、失礼します」

テスラはぺこりと頭を下げて、その場を立ち去ろうとした。

「・・・お前、何かイルマと悪巧みしているな？」

「えっ・・・」

テスラは背中に冷たいものを感じた。それと同時に、イルマの信頼に応える為に何としても秘密を死守しなければならないと思っ

た。この場をどう切り抜けようかと彼女は必死に考えていた。

「あの、その、あの・・・」

彼女の口からはまともな言葉は出て来なかった。ゴドリックから発せられる威圧感と、考えのまとまらない頭。状況は最悪だった。

「まあ、俺は関与しない。ベイカーにバレないようにやるんだな。外に行くなら寒いから上着忘れんなよ」

ゴドリックはそう言うと、軽く手を振りながら去って行った。彼女は予想外の展開に、呆然と立ち尽くしていた。

その日の夜、魁は明日の事を色々と考えていた。イルマの滞在記念をどうやって祝おうかと頭を悩ませていた。嬉しそうにしていたイルマの顔を思い出すと、彼自身も嬉しくなった。

荒れるばかりの日々でいつも気持ちを尖らせていた彼だったが、最近是不思議と穏やかな気持ちになる事が多かった。それがイルマによってもたらされたものだという事は、彼も気がついていた。だからこそ、何かの形で感謝を伝えたいと考えたのだ。

考えを巡らせていたその時、部屋の片隅から何かの気配を感じ取った。イルマがやって来る時にも似たような空気を感じるが、今感じ取ったそれは違っていた。もつと冷たく、鋭い気配だった。

魁は気配のする方に視線を向けた。そこにぼんやりと人影が見えた。次の瞬間、それははつきりと人の形になった。それに気が付くと同時に、彼は咄嗟に耳栓状の装置に手を伸ばした。

「イスタータ人にしては、感覚が鋭いみたいですね」

彼の目線の先に姿を現したのは、テスラであった。魁とテスラが直接顔を合わせるのは初めての事であった。

「あなたは確か、あの時の」

「テスラ・オリアードと申します。覚えて頂かなくても結構です。顔を合わせるのは今この瞬間だけですから」

魁の言葉を遮るように、テスラは冷たい口調でそう告げた。

「随分無愛想だな。あんたE R Aの隊員だろ？」

「はい」

「俺に何か用か？」

「イルマ様の使いで参りました。貴方にこれを渡してくれと
テスラは魁に小さな包みを手渡した。

「これは？」

「中身は分かりません。私が消えた後にお開け下さい」

「てか、明日も会う事になっていたんだが、急ぎの物だったのか？」
魁の言葉を聞いたテスラは、ぴくりと眉間にしわを寄せた。

「イルマ様は来れなくなりました。明日も、その後も。もう二度と、
貴方と会う事はないでしょう」

「ちよつと待て、どう言う事だそれは？あんたの言ってる意味がわ
からねえよ」

冷静な口調で話すテスラに、魁は思い切り食って掛かった。

「私の言葉通りの意味です。それ以上の意味はありません」

「説明しろよ。意味が分からないだろ、それだけじゃ」

「少なくとも、イルマ様が望んだ結果ではありません」

「何か起こったのか？」

「それ以上は私からは申し上げられません。私はこれで失礼します」

「あつ、おい・・・」

魁は咄嗟にテスラの腕を掴もうと手を伸ばしたが、既にテスラの
姿はその場から消えていた。

「何があつたんだ・・・」

魁はそう呟きながら、テスラから受け取った小さな包みを開けて
みた。そこにはイルマがつけていたイヤリングが包まれていた。自
分のリンクジエムだと見せてくれた、あのイヤリングであった。そ
して、包み紙の内側に一言「ありがとう」と書かれていた。

「何だよ、これ・・・」

魁はイヤリングをぐつと握り締めた。

「礼を言いたいの俺の方だよ・・・ふざけんな・・・」

彼の言葉は、夜の暗闇に静かに溶けていった。一番伝えたかった
言葉を、一方的に投げつけられた魁は遣る瀬無かった。テスラの言

葉の通りなら、もう二度と会う事はない。もう二度と、彼女に伝える事は出来ない。魁はがっくりと項垂れ、そのまま動かなかった。

イルマがアリエステに帰還した数日後、彼女はERAを統べるアリエステ評議会から呼び出しを受けた。

「失礼します」

イルマはドアを静かにノックし入室した。室内には、彼女の祖父であり、アリエステ評議会議長であるオウゲンが彼女を待っていた。彼は、孫娘との久しぶりの再会に、思わず顔を綻ばせた。

「イルマ、久しぶりな。元気でやっておったか？」

「はい、お爺様もお元気そうで何よりです」

イルマはオウゲンと社交辞令的な挨拶を交わした。

「今日この場に呼ばれた理由は分かっているだろう？」

「はい」

少しの躊躇もなく、はっきりとそう言うイルマを見てオウゲンは困惑した表情を見せた。

「イスタータにおけるリンクジエム紛失の件だ。幸い、お主のリンクジエムは悪用出来るような代物ではないがこれは重大な事だ。安易に考えるでない」

「理解はしているつもりです」

オウゲンは、真っ直ぐに自分の目を見つめるイルマに、少しの疑問を感じた。

「報告では、不注意による紛失と聞いていたが、どうもお主を見てみると事実とは違う様に思えてくる」

「紛失した事に変わりはありません。罰は受けます」

「そうだな。だが、私は疑問を残す事を好まない。少しだけ、お主の本音を覗かせて貰うぞ」

「どうぞ」

イルマはそう言うと目を閉じた。オウゲンは、イルマの頭にそっ

と手を乗せた。

「ふむ……」

イルマの頭から手を退かせたオウゲンは、静かに呟いた。

「……お主は良い意味でも悪い意味でも、両親そっくりだな」

「母には似ていると自負していますが、父に似たとは思っていません」

少し不機嫌そうにイルマはそう言った。

「いやいや、間違いなくお主はあの二人の子だ。探究心も無鉄砲さも、そして何より頑固な所もな」

「そんな事ありません」

オウゲンの言葉を聞いて、イルマはそっぽを向いた。

「イルマよ、イスタータはアリエステの管理界だ。あくまで管理であつて、過度の干渉はしてはならぬ事になっている」

オウゲンは強い口調でそう言った。

「分かっています。でも」

「何だ？」

「管理界に言葉を与え、文明を与え、彼らの世界を見つめて来た。

だが、進むべき道を決めるのは彼らの役割である。そうお爺様は私に教えてくれたじゃないですか」

「うむ。だが、それが今の話と何の関係がある？」

「私も同じです」

「同じとな？」

「はい。言葉は違いますが、彼に知識を与え、視野を与え、変化を見つめて来ました。ですが、進むべき道までは与えていません。本当はもっともつと、話したい事があつたんですけどね」

イルマは少し寂しそうな表情を浮かべた。

「カイ・アリサワの事か？」

「ええ。彼は、私の目から見ると籠の鳥のような人でした。自分自身という小さな世界の中で、その世界しか知らずに生きています。殻に閉じ籠っていた、かつての私のように……」

「ふむ」

「私はその籠を開けたただけの事。どこに飛び立って行くのかは、彼が決めてくれればいいと思います」

イルマの言葉を聞いて、オウゲンは難しい表情を浮かべた。

「しかしイルマよ、彼に知識や視野を与えたとしても、彼はイスタータを出る事は出来ぬ。彼に夢を抱かせる事は些か残酷ではないか？籠を開け放った所で、その外は大自然ではなく小さな部屋の中に過ぎぬ」

「そのような考え方もあります。ですが私は、その考えとは違います」

「ほう」

「彼なら、きつとイスタータで生きる意味、そしてその価値を見出せる。そう思います」

「ふむ。だが、彼にリンクジエムを託す理由と繋がらぬ。何故彼にリンクジエムを？」

「あれは・・・私を忘れて欲しくなかったから。私も忘れなくなかったから。他の世界で、初めて私が直接関わった人だから」

イルマの答えを聞いたオウゲンの心境は複雑であった。自身の教えをしつかりと受け継ぎ、真つ直ぐな意志を持った孫娘の成長を喜ぶ祖父としての気持ちと、今回の彼女の行動を罰しなければならぬIRAの権力者としての気持ちが入り混じっていた。

「素直な良い子に育った・・・と、祖父としては喜ぶべきだろう。」

しかし今この場では、評議会議長とIRAの一隊員だ。私はお前に、今回の行動に対する処罰を与えねばならぬ」

オウゲンは、覚悟を決めたように表情を変えた。

「はい」

「イルマ・トリエルタ上級士官。お主のIRA隊員資格を剥奪する」
「・・・はい」

オウゲンの言葉はイルマの胸に深々と突き刺さった。イルマは最初から処分は覚悟していた。だが実際に言い渡されるとなると、そ

の心境は当初とは違っていた。彼女はぺこりと頭を下げると、部屋を後にしようとした。その寂しげな背中に、オウゲンは強い口調で声を掛けた。

「イルマ！」

イルマは静かに振り返った。

「下を向くでない。自分でした事が正しい事だと思うなら、尚更だ。堂々としているがいい」

「はい」

オウゲンの言葉を受けて、イルマははつきりと返事をした。

イルマがいなくなった部屋で、オウゲンは静かに立ち尽くしていた。愛する孫娘の夢を自分の手で摘み取らねばならなかった事に、彼はやりきれない思いを残した。静かな部屋に、彼のため息だけが響いていた。

「ただいま」

イルマが自宅に帰ると、門の前でテスラが待っていた。

「お帰りなさいませ、イルマ様。オウゲン様は何の御用だったのですか？」

「あのね、隊員資格剥奪されちゃった」

「は・・・？」

イルマの言葉を聞いて、テスラは目が点になった。重要な事だと言うのに、イルマの口調は何故か軽いものだった。

「だからね、もうERA隊員じゃなくなっちゃったって事」

「何故ですか！？何故そんな重い処分を？」

テスラは自分の耳を疑いながらイルマに聞き返した。イルマは彼女の耳元で、リンクジエムを魁に渡した事やその他の出来事をそつと説明した。

「リンクジエムをイスタータ人にあげた！？」

テスラは声を張り上げた。

「そ、そんなに大声出さないでよ・・・」

「だって、リンクジエムを紛失したら処分されるって分かってるじ

やないですか！どうしてこんな事を！？」

「だってさ、部隊が解散になったらどの道同じ様なもんだよ。新しい仕事だって回ってこないだろうしさ。それに紛失じゃなくて、譲渡だもん」

「譲渡だもん、じゃないですよ！と言うか、いつ渡しちゃったんですか！」

「渡したのは私じゃないもん」

「え？」

イルマは、きよとんとしているテスラを指差した。

「あああつ！もしかしてあれですか！？」

「そう、あれ」

テスラははつきりと思い出した。アリエステへ帰還する事が決まった夜、イルマに頼まれて魁に会いに行った事を。そして、何かを手渡した事を。その何かがイルマのリンクジエムであった事に今気がついたのである。

「わ、私、あのイスタータ人から取り返して来ます！」

「無理無理。これを見なさい」

取り乱すテスラに、イルマはオウゲンから受け取ってきた書類を見せた。

「隊員資格無期限停止、テスラ・オリ　なんで私まで！？しかも手書きで足してある……。どうしてなんですか、イルマ様！」

「いやあ。頭の中覗かれちゃって、多分それでバレたんじゃないかな」

「そんな……。こんなにあんまりですよ！私はいいとして、イルマ様の資格剥奪処分は重すぎです！私、評議会に抗議してきます！」

「まあまあ、そう言いなさんな。暇になった事だし、買い物でもいこ。ねっ」

イルマはそう言いながら、今にも評議会に殴りこみに行きそうなテスラを家の中に押し込んだ。

「ちよ、イルマ様！」

テスラが振り返ると、そこには彼女の予想していなかったイルマの顔があった。明るい口調とは裏腹に、彼女は静かに涙を流していた。

「いいんだよ、これで。自分で選んだ道なんだから。ちょっとだけ・
・悲しくなっただけだから」

イルマは涙を流しながらも、気丈に笑って見せた。

「イルマ様・・・」

イルマの姿を見て遣る瀬無い思いに駆られたテスラは、それ以上何も言えなかった。

部隊の解散の時点で、E R A 隊員としての仕事はほぼ終わりである事を意味していた。当然、再編される事もあり得るが、問題を起こした部隊とあってはまた別問題である。仕事が回って来たとしても、誰にでも出来るような雑務くらいのものだ。イルマはそういった事も察し、自分自身の手でE R A としての活動に終止符を打ったのだ。

Chapter 1 - 7 価値の無い世界

魁が無事に退院して約一週間、彼は入院する以前と変わらぬ日々に戻っていた。

彼は一人、初めてERAの五人と遭遇した現場で、ぼんやりとしながら川を眺めていた。時間と同じ様に、水もまた流れてゆく。もちろん、人間も。時の流れに従い、本来ならば今ある環境の中で前に進まねばならない。頭の中で理解は出来ていても、彼の心はイルマと別れたあの日のままの状態で止まってしまっていた。

まだまだ聞きたい事があった。伝えたい事もあった。そんな希望も、もはや叶える事など出来ない。イルマと顔を合わせて話を聞いている間は、あんなにも近くに感じた新しい世界が、今はどこか遠くに行ってしまったように魁は感じていた。

「有沢、見つけたぞ！」

魁の思考に割り込むかのように、乱暴な声が飛んできた。その声の主が何者であるか、魁は既に理解していた。退屈な日常の中にある退屈な1ページ。今この瞬間がまさにそうだ。

彼が面倒くさそうに振り返ると、いつもの倍ほどの人数が魁に向けて威圧を放っていた。

「随分連れて来たな」

呆れ顔で魁が呟く。

その言葉に反応するように、リーダー格の男が不敵な笑みを浮かべる。人数を揃えた事で、彼は勝利を確信していた。今まで散々苦汁を舐めてきた恨みを晴らす瞬間が近づいている事を悟り、自然に笑みがこぼれていた。

「断っておくが、手加減しねえからな」

魁がそう言うと、相手は一斉に魁に襲い掛かった。一気に乱戦となり、いつも静かな河川敷には彼らの声だけが響いていた。

そんな事が起こっているとはつゆ知らず、雄二と結依は二人揃っ

て帰路の途中であった。

「最近のあいっつておかしいと思わない？」

結依は遠くの空を見ながら、隣を歩く雄二に尋ねた。

「有沢君？」

「うん」

「豊川さんもそう思う？」

「やっぱ、おかしいよね」

雄二の発言で確信を得た結依は、もう一度確認するかのようにようにそう呟いた。

「入院してる間は、不思議と元気だったんだけどね。退院してから
は元気もないし、何か人が変わっちゃったみたいに目つきも鋭いし」

雄二は心配そうにそう言った。

「頭の打ち所が悪かったのかね」

「そんな事はないと思うけど・・・」

冗談交じりに言う結依に対して、雄二は本気で心配しているようだった。

「あつ、安田君。あれ・・・」

「え？」

結依は前方を指差した。

二人が見た先には、河川敷に転がる他校生たちの姿と、ボロボロ
になりながらその場に座る魁の姿があった。

「有沢君！」

雄二はそう声を上げると、魁の方に走り寄って行った。

「雄二か」

「雄二か、じゃないよ！どうしたのこれ」

「どうしたもこうしたも、見ての通りだ。バカみたいに援軍連れて
来やがったもんだから、少し本気で遊んでやっただけさ」

慌てる雄二をよそに、魁は冷静な口調でそう言った。

魁の言葉を受けて、雄二は辺りを見回した。相手の人数が多いの
は確かだが、それ以上に相手が受けている傷の度合いに驚いた。普

段だと逃げて行く余力くらいは残す程度に相手をしていた魁だが、今日は違っていた。その場に倒れる誰もが、立ち上がることをすら出来ない位のダメージを負っていた。

「有沢君、やりすぎだよ。ここまでするなんて・・・」

「やりすぎだ？こいつらの人数と俺の姿を見ろっての」

ところどころ破れた制服と、傷を負った部分を指差して、魁は自分もぎりぎりであったと言う事をアピールした。彼の言う事はもつともであったが、何か釈然としない思いを雄二は抱えていた。そんな二人のやり取りに業を煮やした結依が、つかつかと近づいて来た。そして座り込んでいる魁の前に立つと、何の迷いも無く彼の頭に拳骨を振り抜いた。

「このバカが！」

「つてえな、この野郎！」

魁は立ち上がり、結依と真正面から睨みあった。

「一体何があつたつてのよ！最近変よ、あんた！」

普段あまり感情的にならない結依だったが、この時ばかりはヒステリック気味に叫んでいた。

「何もねえよ！いちいち詮索するんじゃない！」

魁も一歩も引かなかった。

お互いにヒートアップし、このままでは殴り合いになるのではないかと言う空気を感じ、雄二は二人の間に体を差し込んだ。

「ストップ、ストップ！やめてよ二人とも！」

彼は無理矢理二人の体を引き離した。

途中で思い掛けない中断が入り、魁は一つ舌打ちをした。

「止めだ。俺は帰るぞ」

魁はそれだけ言うのと振り返りもせずには歩き出した。

「ちよつと待ちなさい！ちゃんと説明受けるまで納得しないんだからね！」

彼の背中に結依が叫ぶ。しかし何の反応も示さず、彼はそのままその場を後にした。

その時、魁の破けたポケットの隙間から何かが落ちるのを雄二は見逃さなかった。

「有沢君！」

それを知らせるために呼び止めようとしたが、これにも無反応のまま魁は遠ざかって行った。雄二は草むらの中に落ちた何かを探そうと、必死に物が落ちた辺りを探し始めた。

「あつた・・・あれ？」

雄二が拾い上げた物は、彼の予想していないものであつた。琥珀色に輝く石がついたイヤリング。それは魁がイルマから譲り受けたリンクジエムであつた。

「なにそれ？」

結依が雄二の手の中を覗き込んだ。

「有沢君がさつき落としなんだよ」

「魁が？なんであいつがこんなもの持つてるの？」

「分からないよ。さつき落ちたのって本当にこれだったのかな？」

雄二は不思議に思いながら、リンクジエムの不思議な輝きを覗き込んだ。その瞬間、彼の頭の中に鮮明な映像が流れ込んだ。ERAの五人組の姿や、魁とイルマがやり取りをしている場面、そして魁の心の声などが次々に雄二の頭の中に入り込んで来た。

「うわっ！」

突然の出来事に驚いた雄二は、思わずリンクジエムを落とししてしまった。

「ど、どうしたの？」

結依は困惑しながらそう尋ねた。彼女から見た雄二の姿は、イヤリングを覗き込んで勝手に驚いてそれを落とすと言う奇妙なものだった。

「あの人は、確か・・・」

雄二は映像の中にいた女性の姿を思い出した。彼の記憶の中にも、その女性の姿はおぼろげながらも記録されていた。直接話した事はないが、確かに目撃した記憶があつた。

彼はもう一度、確認の意味を込めてリンクジエムを覗き込んだ。先程見た映像が、再び彼の頭の中に直接流れ込んで来た。二度目と言う事もあり、彼は落ち着いてその流れる映像を見つめていた。その中で彼は、退院後に魁がすっかり変わってしまった理由を知ることが出来た。

「分かった・・・」

雄二は顔を上げて呟いた。

「えっ？えっ？何？」

結依は何が起こっているか分からず、まともに反応する事が出来なかった。

「豊川さん、これ見て！」

雄二は半ば無理矢理リンクジエムを結依に手渡した。恐ろしい物に触れるかのように、結依はリンクジエムをつまみ上げた。

「見る？どうやって？」

「そのイヤリングについてる石を覗き込めばいいんだよ」

雄二に促され、結依は黙って石を覗き込んだ。彼女の頭の中にも雄二が見たものと同じ映像が流れ込んで来た。彼女の場合、雄二が見たものに加えて、初めて魁と雄二がERAに遭遇した際の状況も、同時に見る事が出来た。

「な、何なのこれ！？」

結依は驚いてリンクジエムから目を逸らした。

「見えた？」

「見えた、見えた！なんかイルマさんって人が魁と話してた」

「僕も見えたよ。有沢君が何であんな風になってるのかも、分かったよ」

「これが、あいつが変わっちゃった原因なのかな・・・」

「恐らくは。僕らの知らない所で色々あったんだね」

雄二はそう呟いた。

「ところでさ」

ふと結依が口を開いた。

「こんな事って信じられる？私は頭が混乱してきたよ」

彼女は不安げな表情で首をぶんぶん振った。

「僕もだよ。以前彼らに出会ってから、未だに夢を見ているみたいだよ」

雄二も頷いた。

しばらく黙り込んだ後、結依は一つため息をついた。

「私たちは、自分が住んでる世界の事すら祿に知らないってのに。他の世界の話なんて、よくあるファンタジーじゃあるまいし」

「簡単に信じられる事じゃない。でも、無いって言い切るには僕は無知すぎるのかも知れない」

「それはそうだけどねえ。でも、魁がそんなに他の世界に興味を示しているなんてね」

「有沢君らしくない？」

「まあ、ね」

結依はリンクジエムを手にしたまま、そう呟いた。

彼女はリンクジエムを通じて魁の思いを知らながらも、彼が他の世界に興味を向ける理由も、それに固執する理由も分からないままであった。

次の日、登校した結依は、ボーっとしながら席に座る魁の前に立った。

「何だよ」

見るからに不機嫌そうな魁は、ゆっくりと視線を結依に向けた。

「ほら、これ」

結依は昨日雄二から預かったリンクジエムを、魁の前に差し出した。

「何でお前がこれを？」

訝しげな表情を結依に向けたる魁。そんな事も気にせず結依は続けた。

「昨日あんたが落としたの。安田君が拾ったんだよ」

「・・・そうか、悪いな」

そう言いながらリンクジエムを受け取った魁は、そのままそれをポケットにしまいこんだ。そして、何事も無かったかのように体勢を整えた。

そんな魁の様子に我慢が出来ず、結依は口を開いた。

「魁」

「何だよ？」

「毎日そんなんじゃ、イルマさんに笑われるよ」

結依は魁の目を見つめながら言った。

「お前、なんであいつの事を？」

魁は不思議そうに目を丸くした。彼の記憶では、雄二はおるか、結依には一切イルマやERAの話をした覚えはなかったからだ。

「その石を覗き込んだら見えたんだ。あんたとイルマさんの事とか、色々ね」

「・・・見えた？何も見えないぞ？」

魁はリンクジエムを何度も覗き込んだが、何も変わった様子は見受けられなかった。彼には、結依の口から出た言葉の意味が分からなかった。

「とにかく、私も安田君も見えたの。あんたしか知らない事を知ってるってのが一番の証拠でしょ」

結依は半分呆れ顔になりながらそう言った。魁は何も言わず、リンクジエムを握り締めていた。

「あんたはさ、考え込んでたりとか似合わないっての。バカなんだから」

「ちょよ、ちよつと、豊川さん・・・」

ずばずばと何の躊躇いも無く魁にそう言う結依を抑えようと、雄二は恐る恐る口を挟んだ。そんな雄二に構う事も無く、結依は強い口調で続けた。

「悩むより、何でもいいからやればいい。一回会えたんだから、またいつか会えるかも知れないでしょ」

「・・・結依」

「何よ、気持ち悪い声出して。とにかくね、うだうだしてても埒が明かないんだから。やる事が思いつかないなら、たまにはうちの道場に顔でも出したら？」

結依はそれだけ伝えると、チャイムと同時に自分の席へと戻った。彼女の言葉はもつともであった。イルマの事で悩み、自暴自棄に近い状態になっていた魁にとって、彼女の言葉は胸に深く突き刺さった。それと同時に、一人で考え込んでいたのが馬鹿馬鹿しくなった。

彼はもう一度リンクジエムを覗き込んだ。結依が言っていたような、変わったものは何も見えなかった。しかしその輝きを見てみると、不思議と目の前の事を見つめて、何とか頑張つて行こうと言う気持ちが沸いて来た。まるで、遠い世界にいるイルマが直接そう語りかけてくるような、そんな気がした。

イルマが何故自分にリンクジエムを託したのか、魁はその理由が分からなかった。ただの置き土産かとも思ったが、また別の意味もあるのかも知れない。そんな思いが彼の中に沸いて来た。

遠く離れた世界にいるイルマに、どうすれば再会出来るのかは分からない。だが、同じ時間を生きている以上、可能性はゼロではない。いつか再会した時に、イルマにみつともない姿は見せられない。新しい世界を開いてくれたイルマと堂々と向き合えるように、魁は今を生きる事を決めた。

それからと言うもの、魁は悩んでいる素振りを見せる事はなくなった。以前通っていた結依の道場にも再び顔を出すようになり、積極的な日々を過ごしていた。そんな彼の姿を見て、結依や雄二も安心していた。

いつも傍にいる二人は、魁の心境を察していた。イルマとの再会を望み、それに向かって頑張る事が果たして意味のある事なのかどうかは分からない。それでも、リンクジエムを通して魁の気持ちを知った二人は、静かに彼を見守る事を決めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686p/>

ERA

2011年1月20日03時40分発行